

あたしはあたし      フランス

昔むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おばあさんは、いつも夜遅くまで糸つむぎをしました。その後、晩ご飯を作りました。おじいさんは、糸をつむぐフィルフィルという音を聞きながら、ひとねむりしました。

あるとき、おばあさんが、晩ご飯のソーセージを焼いていると、台所のえんとつから、見たことのない女が下りて来ました。そして、おばあさんに、

「パンと肉、スープにひたしたパンかい」といって、食べ物ねだりました。おばあさんは、恐ろしくて、女にパンとソーセージをやりました。

女は、毎晩同じ時刻になるとやって来ました。それが何週間も続きました。おばあさんは恐くてしかたがありませんでしたが、そのうち来なくなるだろうと思って、おじいさんにはだまっていました。

ある晩、おじいさんは、夢うつつに、おばあさんがだれかと話しているのを聞いたような気がしました。そこで、晩ご飯を食べながら、

「なあ、おい、さつきだれかと話をしていなかったかい」とききました。おばあさんは、

「そうなんだよ」と答えました。

「いったいだれと話していたんだ」

「それが、あたしにもよくわからないんだよ。毎晩、同じ時刻にやって来て、『パンと肉、スープにひたしたパンかい』ってきくん」

「それで、おまえは、そいつにやるのかい」

「しかたがないんだ。どうしようもないんだもの」

「よし、じゃあ、明日の晩は、おれがかわってやろう。そんな時刻に来るのはろくなやつじゃない。魔法使いか妖精ラミナか、確かめてやるよ」

つぎの晩、おじいさんは、おばあさんの肩掛けをかけ、スカーフで顔をかくして、糸をつむぐまねをしていました。とつぜん、えんとつから女がするすると下りて来て、おじいさんに、

「パンと肉、スープにひたしたパンかい」といいました。おじいさんは、聞こえなかったふりをして、フィルフィルと糸をつむぎつづけました。女は、

「今夜はすごく働くねえ」といいました。おじいさんは、

「そうとも、きのうはフレンフレン、フィランフィラン、きょうはフランフラン、フルドウルフルドウルだよ」といって、女を横目で見ながら糸をつむぎつづけました。おじいさんには、女がラミナだとすぐに分かりました。ラミナは、

「今夜のあんたはいつもと違うねえ……。名前を聞かせておくれよ」といいました。おじいさんは、

「あたしはあたしだよ」と答えました。

「そうかい、あたしはあたしか。それから、パンと肉、スープにひたしたパンかい」

おじいさんは、立ち上がると、フライパンに油をたっぷり入れて火にかけました。ラミナはすっかりごきげんで、

「パンと肉、スープにひたしたパンかい」といいながら、待っていました。

フライパンがまっ赤に焼けると、おじいさんは、いきなり柄をつかんで、ラミナの顔のまんなかに、さっと、熱した油をかけました。ラミナは、さけび声をあげてえんとつを上って行きました。

ラミナは、外に出ると、大さわざして仲間のラミナをよび集めました。そして、顔のやけどに両手を当てて、泣きわめきました。仲間たちは、やって来て、

「どうしたんだい。いったいだれがあんたをこんな目にあわせたんだい」とたずねました。

ラミナは、いいました。

「あたしはあたしだよ」

「なんだ。あんたがあんたをやったんなら、だれのせいだっていうんだい。あたしたちには、どうしようもないさ」

仲間たちは、そういうと、すぐに闇にまぎれて、あっちこっちへ行ってしまうとしたさ。

村上郁再話

資料『フランス民話の世界』樋口淳・樋口仁枝編／白水社